

土屋正義編輯

繪本石山軍記

第二編

六

遠仕
2269
16



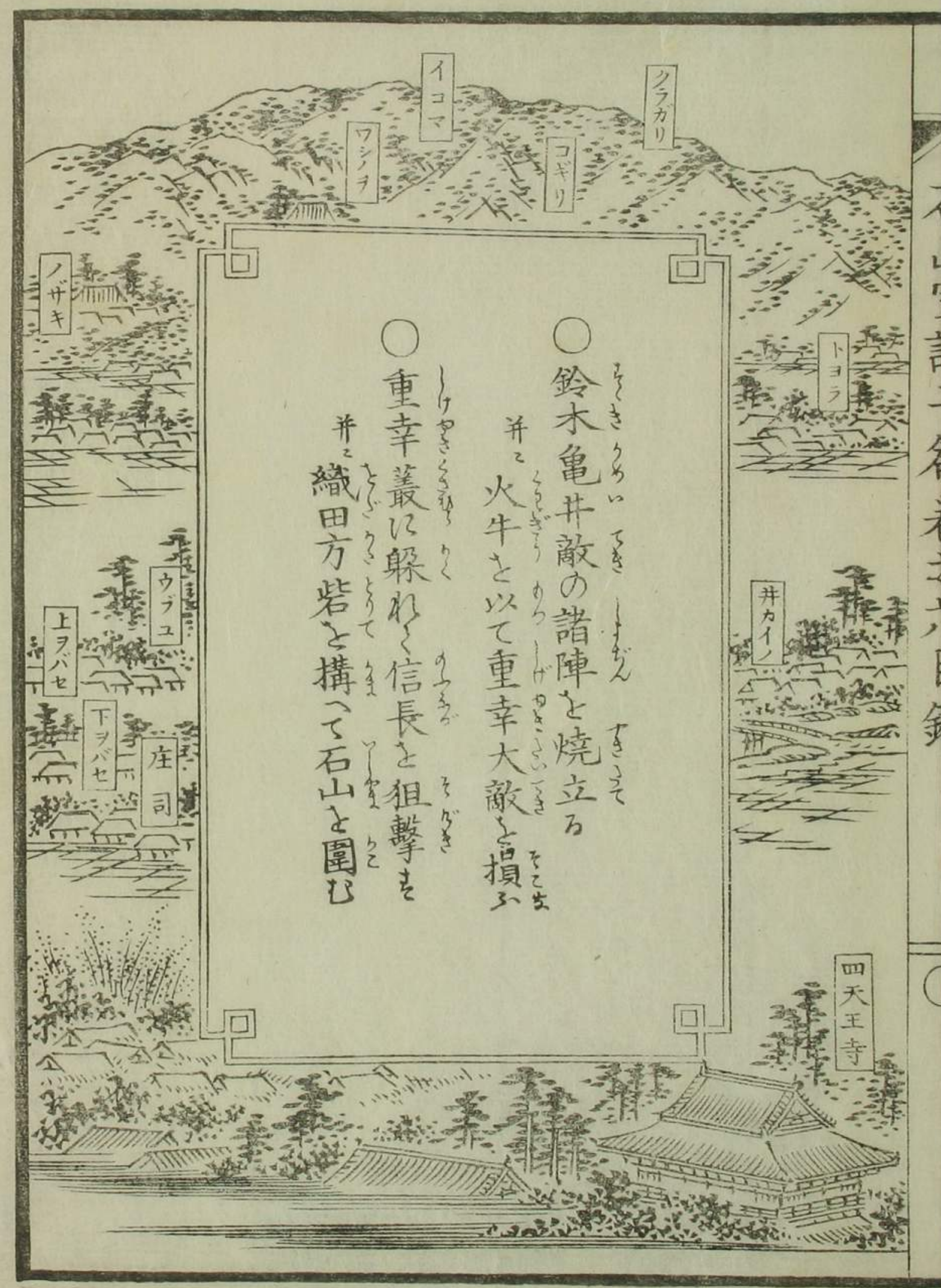
遠14  
2269  
16



繪本石山軍記第二編卷之六目錄

- 重幸織田方と謀地に引入候  
并ニ 三好為三敗走原田陣死
- 信長憤發して石山と取圍む  
并ニ 讀經念佛に敵の銳氣と挫ぐ

石山軍記第二編卷之六目錄



○鈴木亀井敵の諸陣を焼立り  
并、火牛を以て重幸大敵を損ふ

○重幸叢に躲れ信長と狙撃を  
并、織田方砦と構へて石山と圍む

繪本石山軍記第二編卷之六



土屋正義 編輯

○重幸織田方を謀地に引入并び三好為三敗走原田陣死

然程に天正四年四月上旬右大將兼大納言平信長卿去年天正三年十月中旬信長上

願寺を攻め結構之同月十四日荒木攝津守村重攝津伊丹の城主長岡兵部大輔

藤孝惟任日向守光秀原田備中守原の名橋九郎筒井順慶法師等命じて攝州

石山に發向せし諸將命を承りて各軍兵を引牽り部索を定めて進み向ふ

先荒木村重尼崎より同國野田の里に砦を構へ河手の通路と取斷んとす

惟任光秀長岡藤孝石山の良字只砦を構へ原田備中へ佐久間信盛と一隊

に成て天王寺よ屯集し専ら石山の虚實を窺ふ其餘の大將思ひくに石山間  
近く陣取り先近在の郷村を放火し或は田畑を刈荒し軍威を震ふて取圍む  
本願寺に豫て覚悟の繚れし樓の岸と水津の砦を最要として丈夫に構難波  
口より西國往返の船路の便利を旨となして兵糧取入の備を倣し信長京洛に在  
之を聽早く西國よりの通路を絶斷糧米減さざる繚肝要に依て水津の砦を攻落  
し樓の岸の坤に當る三津寺の邊に砦を築き籠兵を以て通路を支厭のち  
総軍石山に卷寄攻懸るべしと指揮し給ひ檢使として猪子兵助大津傳十郎  
の兩個へ兵士を屬て差下さる浪速在陣の軍將達に大將の命令を畏りて去  
水津の砦を攻落せよとて同年五月三日の曉天より合戦の手筈を相定め先  
鋒三好爲三高豊紀州根來寺の衆徒并び和泉河内國武士三好爲人数に加

つる勢凡三千余人後陣は原田備中守畠山甲斐守を大將として山城大和の  
地侍を併せ勢積つて六千余人水津の砦を攻被らんと天王寺よりして押  
出たり諷本願寺(漏聞)にけし軍師重幸諸將を聚めて軍議評定致されん  
る三津寺の邊に敵方より砦を構て糧米運輸の通路を塞がれ止る時頗る味  
方籠城の難儀之より先此計較を折ぐべしとて肥後國八代の城主より相良長門  
守鎮弘に計略細々稟し含め水津の砦に入城せしめて砦の隊將下間少進仲之  
志摩與四郎廣賢等も力を合は次に富嶋頼母栗津右近種貞此兩個を大將と  
して鐵炮の組千五百人を領せしめ是にも計策を授けし打立し戰場の左右  
を候居しうたり 榎も織田方の先鋒に向ふ三好爲三高豊に三千余人の兵士を  
率して水津の砦を攻抜んとて勢ひ猛く押行向ふ相良長門守鎮弘四百人

石山城中の勢寄手の佐久間の強兵と大よ打惱は圖



無不可思議光如來



騎を引随へつ鈕梅鉢の紋の大旗を朝嵐に吹靡して押立木津の砦より八丁  
 余陣を進めて構へにたり三好勢斯と看るよりして鳥銃擊懸矢を飛せて既に戦  
 ひを始めらるる為三高豊味方山口敵兵小勢を以て城を出て寡を以て衆に的  
 らんと是自ら敗を招く手配り唯真一條小責懸り斬立斬崩して附入にせは  
 砦を乗取縛此時之者共何方も滑るふと指揮ありつ自身真先に鎗を振つて  
 相良の隊伍に突へ入れ雙方等しく開を作りて鎗蓋一貫り久織み合て閉つ  
 開きつ戦やうりり長門守鎮弘士卒に指揮して戦ふ中にも合圖を知らせ豫  
 て心得ら味方の兵卒虚謀負て引退くを三好勢ハ勝に乗つ隊伍を亂して  
 後追懸る此邊沿地多く有て葦蘆透間なく生茂り土地案内の者と雖も動ま  
 れ方角を把失ふ雙びるき悪處へ斯共知ぬ三好軍勢門逃るを逐て此処へ

釣入れ刺當の敵相良の勢ハ雨氣の雲の天趨る如く何處へ引も行方を艱  
 一僉是ハ如何と惘れる折しも立地一聲の鳥銃耳元に響きて蘆の間より関を  
 作り下間少進仲之同く宮内卿勢の多少分らね共同喚き叫んで突て懸る為  
 三高豊大きに驚き是ハ敵の術中に陥る者們臆せむ斬崩して一足も疾く茲  
 退けよと焦燥て指揮を為さぬ最に偽り逃退るる相良長門守の二隊盛ふて  
 思ひも寄ぎ右手の方より関を作つて斬て入三好勢彌困忙動轉し奈何せんや  
 関きとり西の方ある河口に續きたる一帶の細道有るが濱邊の方より渾師兩人  
 網振擔げて來懸り一談合戦を看て仰天し躬を翻して元來一方後をも省  
 まに逃去になり為三是を看るよりも彼道よりも濱方に出で廣場お於て戦下や  
 して味方指揮して細道を押合踏合曳行處を後方より相良下間の兩勢遁せ

遣トと追討をせし死傷の者數を知漸々に二町許り引取り前に一條の小  
河あり三好の軍勢は此河へ馬乗入を向ふ渡らんと苛りなれ川底泥土深くて人  
馬の足踏も難く只水中へ五丈許り後方より味方の勢門彌が上へ押懸米り人  
崩れして河へ閃れ足把れて沈む者多く遊ぎ這上らんと為さ者と敵も追  
詰られて飛入者と一生懸命必死の争大半水不溺て漂ふ處へ河上より數十艘  
の小舟に犇と鳥銃を船縁に並べ一個の大將舟の舳に立顯れ大音放つて稟け  
るハ俺を待た石山方の一將も志摩與四郎廣賢と云者之汝等是に來るを待  
縉久佛敵麾下の金焦們志摩が鳥銃の引導鐘地獄の來迎一縉無生佛罰  
の程思ひ知さんと數百の鳥銃つゝ擊に陸水中の嫌ひある間的に切て  
放ち烟の間より鎗を入れて手當る任せ突立たれば後追寄る下間相良ハ方

策に乗ると勇み立て進撃突戰腕限りに余を毎トと斬伏たれば三好の軍勢  
大半討ち盡す蘆原潛つて逃人と為れば忽ち風上より火を放ちて茂りる蘆  
一同に燃上り火光天を貫きて黒烟り地を蔽ふ依之三好の軍勢ハ或ハ斬れ或ハ  
焼殺され烟に咽び泥お沈む鳥銃も撃たれ箭に中られ始め三千余人と聞て大  
軍も悉く奇計に害をきて命全く遁る者ハ僅か五十人に過りしと大將  
三好爲三高豊も既に討ち死す處郎等に助けられ鎧兜も脱棄て赤裸となり見  
苦しくも這々逃り鎗疵鳥銃痰焼傷を數箇處全身を傷られつ辛や  
て天王寺へ引退く後軍に控下原田備中守畠山甲斐守の兩將ハ先陣の音信を  
きか故に屢心元を思ふより軍勢を引隨進之行に敵も味方も何地へ行ん  
其影にたがひぬれば弥怪しく馳行処を遙向ふの蘆原の間に關の聲夥しく

聽て黒烟立昇りて合戦の分野南無三寶三好の一軍共敵の謀地に陥と覺るを  
馳向て救へんと呼び総勢鏖を列へ人馬を逸め鷲直蘆原の間へ喚き叫んで蒐  
入るが豫重幸より指揮を受くる富田頼母粟津右近の兩個鳥銃の組手一千五  
百人疾より此蘆原に埋伏して後陣の敵を俟居るが原田勢の半過行處を仕や  
思ふ坪御座人をまとい一千五百の箇先揃て一同の喧と撃放され尚も伏兵有と  
は氣附ぬ原田畠山の兩軍兵們立地に一千余人的と成ひ之と撃倒されたり哀れむ  
べ原田備中守胸板二所撃抜れて惚も敢て馬上よりして真逆さほに落て死した  
りける原田郎等塙喜三郎箕浦無右衛門野寄四郎池田惣七森本勝助們主人  
の即死を着て憤激し今俺們も死物狂ひぞ敵の撰はぬ卒來れよと石山勢の  
真中目懸面も振も斬入て太刀鎔るまで討立突立終つ一個も残らぬ陣死し

義名を後代に遺りける諸畠山甲斐守の乱る味方を引纏め且戦ひ且趨は  
と石山勢の尚道さほと追蒐追詰計程に死傷の兵卒許多と是も大敗に  
て天王寺へ引石山勢は長追命て不覺を取ると兵士を址上総勢勝鬨を上て  
優々と木津の若歸陣中けり這時織田右大將信長卿は未だ京都妙覺寺に  
在陣もく本願寺の寄手敗軍に速び原田備中守陣死の始末具に注進を聞  
一召て大き小駭き怒り給ひ坊主農民の分際として存外の働き悪さも悪し最  
早俺自ら馳向て微塵疑廢に攻下年來の意恨を晴し吳人と直ち諸將へ  
陣觸有て五月五日京都を打立今日河内國若江郡若江の城に着陣し給  
ひ々々

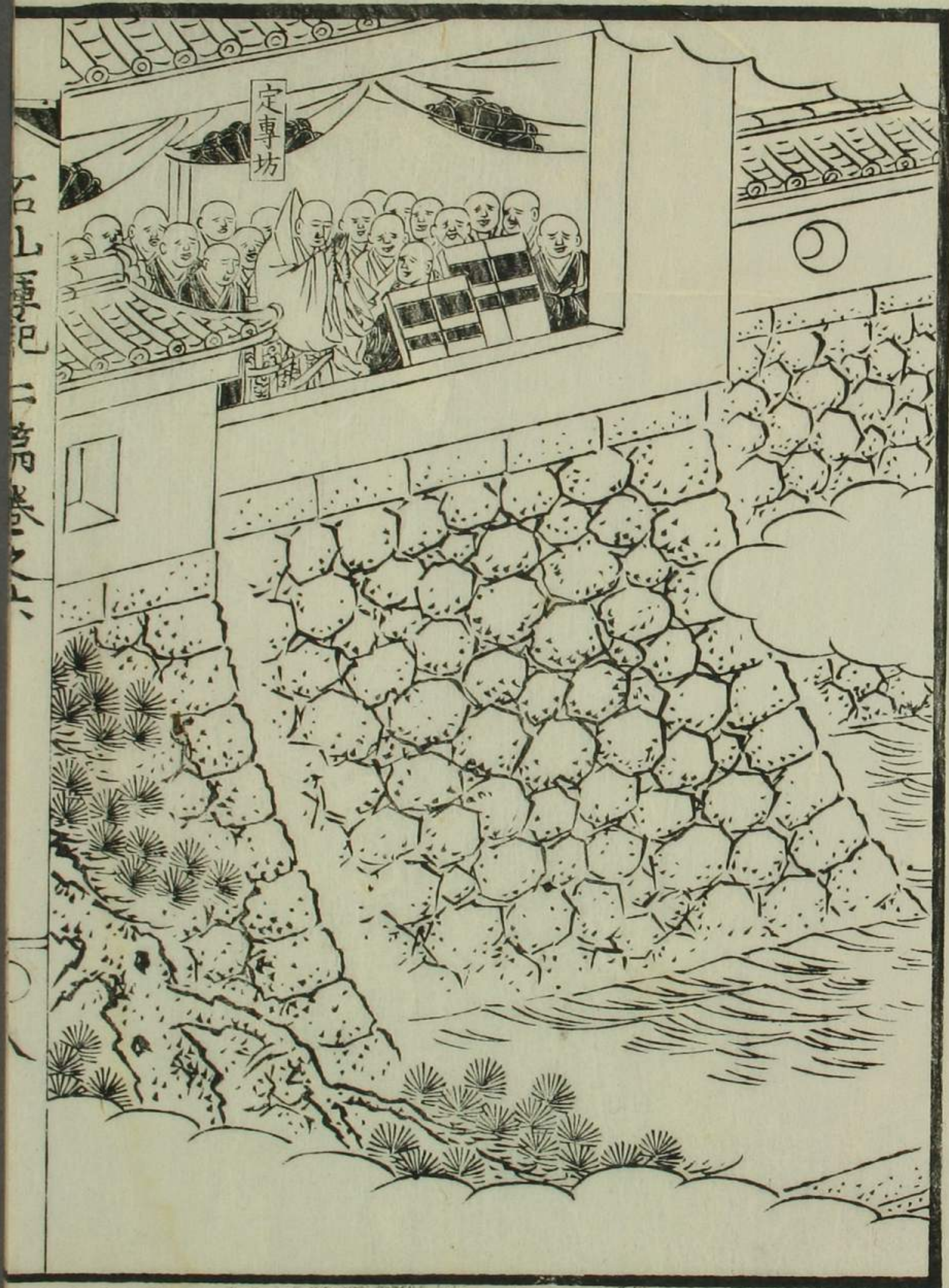
○信長憤發して石山を取圍む并に讀經念佛に敵の銃氣を挫ぐ

石山軍已二高峯



倭て翌六日織田信長卿ハ若江の城を出立有て三万余騎の軍勢を手配り  
 堺の津より住吉を経て荒陵山天王寺に着し給ふ石山方ハ敵將信長自ら大兵  
 卒して向ふも疾くも注進する者有より諸將集會して軍議評定各論判區々に  
 逮ぶ時中下間頼麿の稟しけるハ今般信長當處へ進發せら數度敗軍を憤りて  
 勝負を一舉に決せんと思き合戦之殊に越前國の攻入を聽に數箇の城砦を不日  
 に攻陥し籠兵勿論數方の門徒老若男女の差別なく根絶し之と暴殺せし由  
 余惡逆非道和漢に類す故今今根本の本願寺とて打向ける剛敵信長只  
 尋常の防戦にてハ斯る要害能當城にても攻破られ人緯無に非ず宗門茲小到  
 り斷滅せ開山鸞師ハ分解もを別て大切に迫る防戦之軍師宜く籌策を廻らさ  
 れ信長の暴激挫ぐ手段あり有欲しと望しければ鈴木重幸莞爾と打笑某し

豫て恁有んと存せし故秘密の心策設け置られ織田の大軍微塵に摧き間よ  
 くば佛敵信長を討課せ永く愁眉を開らんと欲す而已強て心を傷め給ふに逮  
 ばむとて一族鈴木孫市龜井六郎を召りて奇密の謀策を言會急て紀房表へ  
 出立せしめ次に三番の定専坊を呼んで何哉計議を牒し令し諸方方の持口々々  
 兵を手配り弓鳥銃を嚴重に備へ寄るを遲しと候懸しうり時五月八日の  
 黎明刻天王寺より織田の大軍押出し本願寺の南大手へ仕寄る先鋒ハ佐久  
 間右衛門尉信盛松永彈正少弼久秀長岡兵部大輔藤孝二陣ハ滝川左近將  
 監一益蜂谷兵庫頭頼隆惟住五郎右門長秀稻葉伊豫入道一徹齋氏家左京  
 亮經國池田勝二郎信輝後陣ハ信長卿の旗本馬廻り総勢凡三万五千余騎闕乃  
 聲ハ天地を動し犇々と攻寄鳥銃を擊懸箭を飛せ緯篠を亂し如城中



石上野原



織田勢と  
欺く圖  
重幸が計策

佐久間先隊

石上野原

の兵士六狭間を閉ぎ、故意鎮り入りて敵を近寄重幸が合圖を候居うり寄  
半の軍兵に我と柵を引除鹿角木を倒し堀裏に把着石懸に指かけ或ハ熊手  
鎧鎗を引掛乗入人と為ける處を軍師重幸時分ふりと合圖の鳥銃鳴まや  
否や関ヶ原狭間を二回小関と打開くと着る間もなく構置る許多鳥銃箇先  
揃て撃出し鎗薙刀の長柄を以て堀に登れる寄手の兵を破乳離々々と突落し  
或ハ刃斬刎轉し茲を破らせしと防ぎられ瞬く間に寄手の軍兵二百騎許り  
討殺されし思ひも知が半町余り人雪類して扯退く大將軍信長後陣に在り談  
形勢を見聞し給ひ違なき者等が舉止哉先陣二陣二隊に多無二無三乘込や  
退く士卒刺殺す下と采配打振指揮有るハ諸軍ハ之に氣を勵まされ曳曳  
聲を張上つ被き列て攻上るにぞ城兵も茲ぞ二世の大難場宗吉の為に命を

棄て防げや禦げと互に覚悟し死勇を盡して戦ひて雙方手負ハ夥しくつ果  
て見送りたる時に大手前の角櫓の裡に雑兵二個立顯はれて大音にて  
稟りたる當山門主顯如上人寄手の御大將信長公一言稟すべき緯の候めて  
唯今此櫓へ出らば候之這段大將軍達せん對面給るべしと呼せ軍師重幸  
が指揮とて三番の定専坊の面貌恰好能上人に似たりと緋の法衣七條の袈裟水晶  
の念珠を摘繰十五六個の僧衆を引具し大手の櫓へ出にけし寄手の兵士們之  
を視て須乎御門主の出らまはるぞと鳥銃を止め信長卿(斯と言上に速信長朝  
笑つて取敢給む賣僧予に何を謂んと為るや聴に速む鳥銃にて疾々撃殺せと  
心嵩給ふ佐久間信盛諫めて稟も様敵將軍頭に礼衣を更え一言伸さんと望める  
處を飛器械にて討殺さる君の御威光少きに似たり先一應ハ旨趣御聽有ク對

久無益に思ふ多ぶ某御名代に罹り出口演何辯承りて尔仔細に因て明らに  
面無益に思ふ多ぶ某御名代に罹り出口演何辯承りて尔仔細に因て明らに  
攻伐し給ふに非判あんや短慮功を為すと諫めね信長最と同一給ひ佐久間  
を以て亦云処聞し給ふ信盛馬に打衆陣前に出織田殿の老臣佐久間信盛君の  
名代として茲に來れり門主の言処信盛承つて逐一主君言上まき之速に伸き  
と演らるる再時定專坊を高く當寺の元祖親鸞聖人一向念佛弘通有て以  
來既に星霜三百余歳を經代々の天子將軍も信仰深く忝も教領所として今  
も猶々斯の如く然るを織田殿何の謂わ我宗門を惡み給ひ去る元龜元年の稔よ  
り天正四年の今に至る迄七箇年の間軍馬を向られ多勢の庶民鬪諍の死に歎き  
ても猶余りあり原來愚僧徳薄と雖も宗門化導の外他念を公正に悖り國禁  
を破り罪を醸するの覺も亦畢竟斯籠城の防ぎを構へ信長卿の武威に攻崩

され宗門退轉を歎き惜心もばも拒し諍ふあり毎事敵味方の陣死手負苦  
喚苦聲の目前に修羅道誰の苦悩と好むらんや望むらくは信長卿仁心を棄  
給ひ貪道一個に罪を帰せし門徒の者們の助命を許され兵を退け宗門立給ひ  
亦有難き善根無量之唯此辯を乞奉らん為佯宜く俺言を執達有し其間に  
今朝よりて敵味方陣死の者不便を亦未來成佛の回向累さんと西の方に向  
つて合掌し衆僧と同音に香を薫し南無阿弥陀佛くと太高らうに唱はれ寄  
手の中にも一向宗の兵卒斯と視るより声を放ち噫有難や勿体なき敵方の吾  
輩までも助け救ふとの大慈悲ある活如来様の御躬に對ひ争々又の立ちたぎ  
ぞ逆罪深き俺們が躬の後世乃程こと恐しけむと鳥銃弓箭を大地に投捨  
掌を合つ平伏せよ宗旨に有る軍兵までも實に殊勝の上人の形勢也宜方

處も有難しとて俱合掌念佛唱はな佐久間信盛大に困り急ぎ信長卿へ言上  
おま信長大きに怒り給ひ悪き味方の兵卒們賣僧坊主の舌頭に欺れ予指揮  
に悖れを奇怪ふれ漫に念佛稟き奴原の味方より兵斬殺し吳人頭如出する  
こそ僥倖なれ鳥銃にて疾々撃殺し一息に一山乗取やと陣中響き度る大音あて  
烈しく指揮を倣給ひ逸り雄の兵卒七八十騎弓鳥銃を引提り大手先へと駈  
出を一向宗の味方乃兵卒們鳥銃の箇先に立塞り佛の脈を殺さんとい悪魔外道の  
行狀あるも亦介さずとて摺合殆同士討にぞ速びる此時寺中に鉤鐘の音  
とろくと鳴響りて櫓々に管絃を奏せれば定專坊の衆僧と異口同音に管絃の  
律に合して淨土和讃を誦しりりら尊るも最有難く覚寄手の軍兵肝に銘  
ト心に徹して詮便を知らず大地に轉び合掌して南無阿弥佉佛くと一向一心に

稱名しけるは爲方むぞ看へりなる彼此時を移せる程に夏の日の永きも更て  
早黄昏に近着つ諸軍銳氣を失ひぬれど一の信長手段に盡頭に施すまき  
計略もあく唯惘とる計りふりあり

○鈴木亀井敵の諸陣焼立并に火牛を以て重幸大敵を損ふ

却説石山本願寺の軍師鈴木源左衛門尉重幸が一族鈴木孫市郎良因亀井  
六郎満李の兩個の前に重幸が秘計を領承し夜を日に繼て紀伊國多雜賀乃  
卿に趣き住馴し己が故郷多々妻子女子從類も諷地小潜り且暮石山の音信而已を  
妻子の殊に候居られ共鈴木亀井等無雙の英雄ゆ石山に入城より以来の家を願  
妻子を棄置惟介一命を御門主に捧げ粉骨碎身して軍忠を勵し今般古郷  
へ歸ると虫し心強くも俺家への音信せが軍師重幸が指揮に隨ひ雜賀の衰

民三百余人を談合牛三十余疋馬三十余疋を集め柴薪蘆葦の類に硫黄  
焰硝を酒ぎ懸依に入糧米の如く製へ車に積て彼牛馬に牽せ紀州根來より  
運送せる糧米の由に言計較て織田殿の本陣摂州天王寺へ道を急ぎて運び來  
に夕時五月八日の暮刻に天王寺本陣へ看しし金木龜井も農民は省  
兵糧方有司に打對ひ俺們は紀州根來領の農民之縁て仰せ渡さる糧米運送  
致し來て候ふと云陣の守衛佐久間甚九郎正勝敵方の謀計と夢にも知らず  
根來へ稟し渡さる緯も粗君より御沙汰し給ひし此も之と疑念なく太き  
喜び對面して汝們遠き路程を厭む途々糧米を送り來る段神妙の働き上へ  
の忠節速々陣中へ運び入り馳て君の御歸陣を候受御賞詞にも預り宿陣して明  
朝緩々歸國すととて陣中の雜兵們に指揮して特來し兵糧取入んとし俵中

伎倆の仕懸設けし敵兵に取扱ひて大事と孫市進み出て雜兵等を留め  
各軍場の進退多用に定めて終日草臥給す談兵糧の一件に於て僕們に御任  
せふとと三百余人の農夫門手毎に俵物を擔ぎ入差圖の場所積置つ  
時刻の至るを候居りし皆て信長卿は今日の城攻に敵の方策に兵士を陥ら  
れ一同勇氣を折るれ無念なき軍勢を纏め天王寺の本陣をとして  
晩過刻に引取せ給ふ鈴木龜井等遙に之を看く時分はと響き合農民  
も嘆き慄して積重ねる俵物の口一同燗と火を附け立地火薬に傳ると  
均しく火勢八方お逆ると看る内建列わる陣家々に燃つき平一面の火とある  
程に本陣守護も佐久間甚九郎は是は乍麼如何と刀を引提玄関端へ駈出  
處に早四方より関の声て敵は誰とも夕暮れ黒烟の中より鋒を揃へ散花微

塵に斬廻る何久以て驚きんや原來石山よりの夜襲多防名撃やと  
 叫ぶと雖も烟に捲き不意の討込もせ飛巡る烈火の中に途に惑ふる上下  
 の軍兵一個も戦んとする者なく會見苦くも我先にと右往左往に迷惑へ  
 陣の内外に討る織田勢介員知ると聞へたりけり信長途中に火の手を着  
 給ひ驚乎本陣の空虚を計つて夜襲の敵と思われりぞ駈向つて蹴散せよ  
 やと總軍鞭に燈を合せて逸散に駈て帰り結ぶを待設ける鈴木亀井は豫  
 て伎倆一絳あるが六十余足の牛馬の脊に火薬を仕込し俵物結着信長の引  
 把道條牽行様北向に相並せし俵へ火を附て追放ちけし何久以て惚る  
 きや立地烈火四方八面に飛せ牛馬の全身を焦しけし牛馬の苦声啼  
 り出と踊り列つ狂ひ暴れ駈來る信長の隊の中へ叫り廻つて駈入勢必

死に迫まる畜生多雜兵騎者の嫌ひあく角に懸たて蹄に蹴倒堅横無兼  
 暴込むものら誰を之を制まべけんや隊も崩れて顛倒敗走猛火に焼く牛馬に  
 踏れ或いは嚙突れ手足を焼給七轉八倒の奔走云様なく牛馬も人も必死の  
 狂ひに先陣後陣小荷駄の陣まで狂苦の牛馬に駈暴され持ら及に已と貫  
 き死傷に逮ぶ者少あらず鈴木亀井は今甲夜の奇策を軍師重幸より木  
 津と難波の若に籠る兵士の者へ火の手合圖に駈着て鈴木亀井に力を戮  
 して存分織田方討崩さべしと密に謀り置りなれば平等違へて選兵出て  
 鈴木亀井の指揮を請て大將信長討洩まふと兵八方に押廻しつ面々信  
 長者附討んと暴らりたり斯れ軍に馴し織田勢も不思議の方策に懸悩さ  
 き大軍をく一戦にも致らざる兵器鎗刀大地に投棄主従父子救ふ暇なく総

軍散々に成り敗走に這時石山の城中より軍師重幸が指揮として楠定專坊  
を大將として端の坊報恩寺八木駿河守等三千余騎を引率して大手の城  
門を推開き織田勢の引行後より一声の関を作り鍛丸の高嶺を轉ぶ如く帷  
逸散に馳着討て懸り一言の問答にも及ばざる幸に斬立突立後崗に責入  
るれ織田の軍兵們踏留つて支へ戦ふと仕る處一件の牛馬暴びたるに前後  
の動乱何為る間もく人波打て悶擲し唯四方八方へ逃出せ而己佛敵信長討  
らるる衆口呼つて斬入れれば大將信長卿も火畜の奇計深く心に恐怖給ひ  
志を合ハ協作と駿足に鞭打味方の大敗處に者辛く上小橋村へ逃込  
自是田畠の中を馳給ひ河内國東足代村茨川郡まで漸く遁れ來給ひる最  
も斯る亂軍の間ゆ大將の御身守護の兵多く危多し單戰に逃給ふ思ひ

も寄ぬ大敗軍あり然り日來に君命に代りて馬前の忠死を心懸る織田家  
恩顧の勇將及び旗本替々の家臣達も鈴木重幸が妙策に劫され肝心大  
將の行方を失ひ火畜の暴に壁易を辛く己の一命を抱ふに唯四方八  
面に散走せし以ての外も緯共之其の中にも惟日向守光秀長岡兵部大輔  
藤孝ハ大將の御躬心元を思ひ動亂の中を眼配つて助け奉らんと馳廻り  
一ふ八日の月影に晃きける兜の星の金乃光に緋威の鎧を着る武者一騎  
上小橋の方へ馳り着て是を御大將と思ひければ藤孝光秀馬の蹄を馳  
させ後に續きて追馳し久諺に敗軍の烟の案山子も追來る敵らと首紛  
ふ如く信長卿ハ茲に到つて又も重幸が術中に總軍陥りしと恐れ給へば  
藤孝光秀の慕ひ來るも敵の追討しと思はれれば尚も馬蹄を飛されつ



つ田圃畷道の狭ひ多、横斜に異の方へ駈給ふ東足代村近き小池の土堤まで  
 來給ふ處へ光秀後より聲かけて曰く夫進ませ給ふ御方へ我君信長卿にて在り  
 せや俺們長岡明智にて候ふ今敵間も遠避りて候ふ暫く御休息有て散兵を  
 聚め給へりと呼留れば信長始めて心安堵給ひ馬を止めて顧給へ兩將御馬前  
 へと駈着る信長御飲ひ斜めを以主従馬口相並べて暫く息を憇れ居り光秀  
 遠に天王寺の方を指ざり做つ稟し御覽を如く彼火の手へ本陣既に燒失  
 と看候ふ今我君の御座所分を鈴木之輩尚奇計を施し敗兵惑亂の虚衆  
 大將討得たりを偽言を觸し諸軍那首を追散されて愈味方の不祥と  
 成べし倘一時の虚謀と稟しを知らずも諸軍の心を驚しむれば請に陣死す者も  
 有へく是差當つて氣遣へ候唯今君前に藤孝之あり暫く君の守護氣

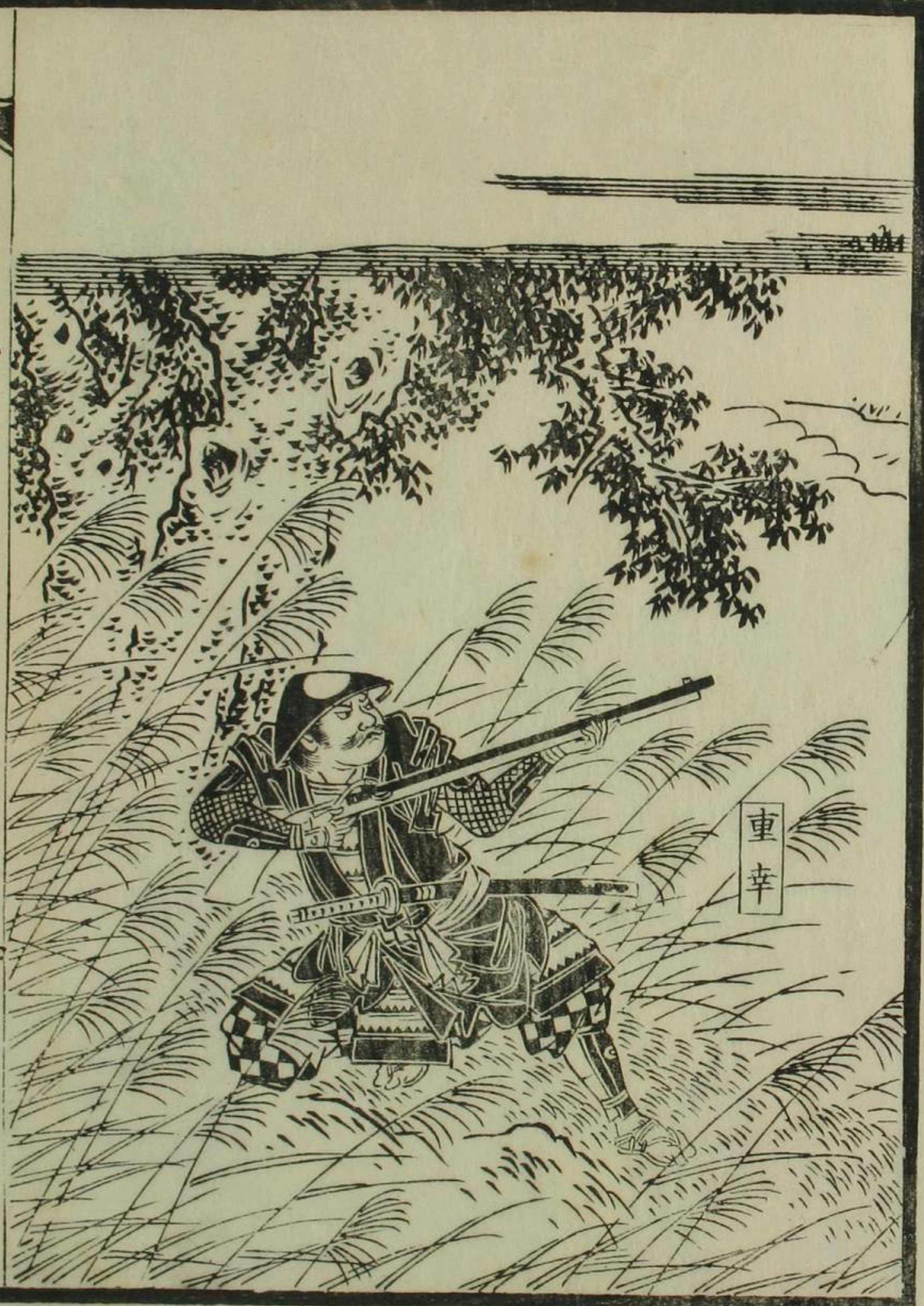
遣ひあり其自是天王寺へ引返し君御安體の言を觸聞し亂動を鎮め敗  
 兵を集め馳て此處へ馳參り稟す須臾御暇と伺ひ信長尤と仰  
 せられ小意お同どて返させ給へ光秀畏りて馬の頭を立直し一鞭揚て馬を  
 飛せつ天王寺の戰場へと馳返りけり

○重幸輩に躲きて信長を狙撃せし織田方若を構て石山を圍む

信長曰く否とよ余の緯に非む信長當時予箭を執りて天下の内に横行檀ふ  
 ち声を發つて高笑ひ給ふ長岡藤孝不審て云く君に何思ひ食て笑せ給ふや  
 ま數家の強敵と打片大國所領を併吞する緯作麼幾許と云敷を知らず然る  
 に本願寺の坊主門を該年來度々相敵とあり斯敗軍せる緯可笑くや是彼三

虫の刺害に等く蛙の蛇を恐るも雖も蚰蜒を喰ふ蚰蜒蛙を恐るん共蛇を害ま  
蛇の蚰蜒に縮退され共蛙を喰ふ此三虫の刺殺を思ふに予が本願寺との戦業蚰  
蜒を負る蛇にて頭如居るが門徒を喰ふ蚰蜒を餌とらる蛙の如く俺の剛き  
を以て當らんとされ弱きを以て防がぬ却て謾りて敗を索むる諷意を以て予  
笑ひし亦二匹の鈴木重幸なる者武を用るに頗る法あり可惜武士の佛に淫し  
益なき軍に坊主們を助けて生涯を苦くも亦可笑くも三匹の鈴木重幸軍  
術に達し能兵學に熟せりと聞ども予之を視る穉小兒の如く實重幸兵術に委し  
り共諷野邊四方に兵を伏て予が敗走を討べきの處之然る隊も心着ざること流  
石に匹夫亦笑ふと其御詞も未終らざる処に耳元に鳥銃撞地響くと等く  
信長卿を馬より下へ撃落り長岡藤孝大に驚き何者の処為るにや當

の敵道下と飛鳥の如く駈回れども目に遮る敵も多く主君の安否も心  
あなぬ馳返りて倒れ給へる信長卿を扶け起し御心馳与在せ給へや長岡藤  
孝是に候と大音に呼活奉れど御呼吸弱々人心着せ給へ今斯よと着へ  
給ひと藤孝愈周章狼狽急処を撃れ給ひつらんと疵口を捜し改め着る  
に僅不股の外を撃幽りて然の痛痕も着給へ是口惜き御事あるや斯  
許の薄疾の為に絶倒し給へ何緯ぞや御心付させ給へると二回三回呼活れ共高  
に御答へも無りしと藤孝元來氣轉乃良將也信長卿の胸中と推察し是  
敵を欺く空死ありと逸くも心に曉りしれが故意愁を合しし声を發ち借々痛  
みの御形勢もさきも英名四海に轟く古今独歩の御大將も既武運竭  
させ給へて今や流丸の為に命を隕れ黄泉の鬼と成給へんと嗚呼是非もか



き御身の果やと鎧の袖と顔に押當て目に着ぬ敵に聞へく大地に平伏声と  
 上て要時空哭や居りたる乍麼此時信長を狙ひ寄て一九に撃留人とせし  
 痺者と奈何ある敵と尋ね着るは是石山城の軍師なる鈴木源左門尉重  
 幸に今甲夜天王寺と焼討に續けて火獸を放つて脅し此虚に乗して信長  
 卿と首附次第に討課せんと火勢の上ると着るより速く介躬雜兵の容ふいて  
 扮手練の手筒を引提つ豫て信長敗走の時に速く河州若江の城へ引把へ介  
 途中にて討把をよと心に目算極めたり遠く東足代村の野辺に來り若江  
 街道の傍る小池の汀の薄の繁も深く躬と潛して候る處へ案に違ひも信  
 長主從僅に三騎逃來りたる重幸心に大さ歡び天の與る佛敵信長や  
 這場の道とくずと光秀後へ引返をも僥倖狙ひ澄して撃放せしが薄の繁も

に深く躲れが彼藤孝も之を首留も猶も竊て容子を窺へ信長落命有る由  
 にて藤孝此上より秋傷もより重幸天と持して倍々歡び佛敵討課せごに徹  
 も上の藤孝と相闘諍て信長の首級把を速く片時も此地と去に如きと薄  
 の繁も脱出つぬ道傳ひ小猪飼野に出玉造の郷を打過て難く石山へと馳  
 歸りたる諸も亦惟任日向守光秀は天王寺の戦場に馳戻り乳る諸陣を打廻  
 て大將若江城へ退き給へ何方も彼首集會有る此音下々散兵の向告知  
 されよと呼び其躬も手勢を呼纏めて以前の地へ馳來りたる夏夜の明るに  
 間もなく早明六の鐘が打鳴りたり藤孝主君の前に兩手とつき光秀手勢  
 纏めて参着候ふ別に伏兵もあらず候へ早々若江城へ入御るもこれ一統安堵  
 せしめ給へと言上りて這時信長漸く起上り藤孝光秀の勲忠を感稱あり

馬引寄て打跨り若江の方へ急がせ給へ光秀が集り勢五百騎許り前駈  
 後從に守護し奉九日の朝辰の上刻に主從入城を給ひたる然信長卿の即  
 智に依て敵の多少に分きて雖も落命の休着せ給ひて由敵の望も満足せ  
 しめ余儘引把き手段之僅に主從兩個の絆ゆ取圍まれて防ぎ難く故意空死  
 るし給ひなればさうもの重幸も心を緩め撃捨に退きさる藤孝も亦然る人  
 られ信長卿の心中を察て高く哀悼して視聽を欺き却て無事を索めたる計  
 ひ君臣一對の奇戈とて聽者舉つて称美せしとて徳て天王寺に鈴木亀井  
 の徒火畜の方策に敵を悩四方八方に追捲り程に敢て一個も敵對者なく  
 秋風樹の葉を散さる如く己が隨意逃去し本陣の炎上消防の的なく時節夜  
 風吹起り出天王寺境内の僧坊へ燃傳り堂舎三箇所類焼るも諸信長

卿若江城へ入て追々不敗兵を集め給へ散兵夫々聽傳へて馳着るが火畜の  
 暴に兵卒們多分四肢を踏蹴飛され或ひの鬚髪を焼れ面体を踏にられ大  
 小傷を索めざる者無りたる信長意外の大敗無念と諸將を召て議し給へ様  
 予数度の戦に敗北するは是偏鈴木重幸一個の處為依て先本願寺を圍き  
 と如何ぞして彼奴を引捕首を刎て年來の鬱憤を散り而して後石山を攻詰  
 る何方も処存聞ま欲しと問給へ時高井順慶入道京より君の仰せ御最  
 に存り奉る然らば重幸も一城の兵を預り軍師と成て勝敗を指令刺客間諜の  
 者勿論胡亂の者嚴密に吟味絶し余要慎むべく候亦計略を以て外釣出  
 し不意に討取んと計較も軍中に数年任る大將分輕卒に外出致さく却り  
 計策の裏を搔る時毛を吹て瘻を索む悔有べく故に愚案に存り候は

唯遠卷に石山通路を止め此石を構て諸關を修ひ第一に兵糧運輸を断絶  
城を折く最上の手配中國毛利三家に於て宗宗より本願寺を信伏の大族管を  
兵糧依頼の内諾有人石山是を支ふる時堪も籠兵討て出下介時味方手段  
を盡すべ重幸韓信の智有と謂とも計畧介圖的中か其方に一固も討緯候ふ  
併是急速の術計に行き且若關所を設け後緩々企つ結構を君に且御本  
城御還陣有て然らんと思ふ処を言上せし長岡藤孝惟任光秀も順慶の速  
る處確論と感稱し俱々信長卿へ勧め奉りなれば信長卿も今敗兵勞卒以て再び軍  
卒て攻寄難く亦順慶の勧め考へ給へ石山毛利と標し合々海陸大軍攻上り  
忌々敷緯の大事とて終に順慶の詞も隨ひ諸方若の御指揮有て御躬に旦  
還御と定め給ふ

